

原純輔・海野道郎『社会調査演習』
東京大学出版会、1984年（第2版2004年）



海野道郎氏と私が『社会調査演習』をまとめた経緯は、初版「はしがき」に詳しい。

「しかしながら、この演習あるいは実験形式による社会調査技法の訓練というやりかたは、著者たちの考案によるものではない。両名の恩師であり、いまは病床に臥しておられる安田三郎先生（関西学院大学教授）が始められたものである。安田先生は、本書でいえば第2章の作業と問題から成る、『社会調査実験マニュアル』という謄写刷の小冊子をつくられ、実際に授業に用いられた。われわれもそれをうけつぎ、内容の加除・差替え、記述の変更などを試みながら、それぞれの職場で授業を行ってきた。

今回、それらを持ち寄って完成したのが本書であるが、社会調査法の概説、作業の解説、数表、作業用資料をつけ加え、社会調査法の教科書としても、場合によっては独習書としても利用できるようにした。」

このやり方が優れた社会調査教育法の1つであることは、多くの人々が認めるだろう。しかし、実際に行うのは必ずしも容易ではない。それが可能になることを願って、出版を思い立ったのである。安田先生に託されたわけでも、指示されていたわけでもない。このような理由であれば（当時、病床ですでに意識の回復しない状態にあった）先生も許して下さるだろうと勝手に考えて、同年代の教え子である海野氏にも協力を求めた。

本書は、1. 社会調査概説、2. 演習マニュアル、3. 社会調査資料、の3章から構成されている。中心となるのは、いうまでもなく第2章であり、2.1 系統抽出法と比率の推定、2.2 確率比例抽出法、2.3 統計的検定、2.4 クロス集計とエラボレイシヨ

原 純輔（放送大学宮城学習センター所長）
ン、2.5 コウディング（職業分類）、2.6 尺度構成（項目分析）、2.7 評定法・序列法・一対比較法、2.8 統計図表の描き方、2.9 調査票の作成、2.10 聴取調査、の10節（作業）と2.11 問題解答、から構成されており、上記の『社会調査実験マニュアル』に対応している。

私の手元にある『社会調査実験マニュアル』（1965年）は、B5判55頁の謄写刷冊子で、表紙以外は筆耕者による手書きである。1966年から70年の間、東京教育大学と東京大学における社会調査法の授業で用いられた。ただし、これは第3版であって、初版は1961年につくられている。私が授業をとったのは3年生のとき（1966年）であるから、第3版を使った。

グループ単位で共同作業（実験）を行って、各人が毎週レポートを提出するという授業形式は、初めての経験であり新鮮だった。また、社会学の基礎知識や語学力に関して、級友たちに強い劣等感をもっていた私にとって、同じスタートラインに立てるということも魅力的だった。私は、たちまちのめり込んでいった。安田三郎『社会調査ハンドブック』（有斐閣、1960年〔1958年発行の謄写刷あり〕）と福武直『社会調査』（岩波全書、1958年）とが参考書として指示されていたが、学年末に友人の『社会調査ハンドブック』と私のものと厚さを比較したところ、私のもののほうがはるかに厚くなっていた。それだけよく開いたのである。

しかし、それだけよく理解したかといえ、これは怪しい。各作業に付されている問題、とりわけ統計分析関係の問題には、歯が立たないことが多かった。もちろん、簡単な解説がついてはいたが、簡略すぎて役に立たないし、指示された参考書も、初学者が使いこなすには難しすぎた。『社会調査実験マニュアル』の「はしがき」には、講義形式の授業は行わないが、学生の質問には答え

ると書いてある。しかし、気軽に幼稚な質問のできるような雰囲気は、安田先生にはなかった。

その後の経緯は、冒頭に掲げた「はしがき」のとおりであるが、学生時代の苦痛や教師としての授業経験を踏まえて、『社会調査演習』で付け加えた変更点について記しておこう。

(1) この一冊ですべてが可能となるよう、作業に用いる調査データは、たとえばサンプリング、コーディング、尺度構成などに必要な個人データも含めて、3. 社会調査資料として余さず収録した。また、2.11 問題解答も新設した。

(2) 初学者や独習者が入っていく筋道となるよう、とくに各作業の調査プロセスにおける位置づけが理解できるよう、1. 社会調査概説の章を新たに設けた。また、各作業の解説もなるべく丁寧なものを心掛けた。

(3) 本書は基本的に調査票調査を前提にしている。しかし、聴取調査の場合でもある程度の標準化が可能なテーマがあるのではないかと考えて作業に追加した。2.10 聴取調査では高齢者のライフヒストリーを取り上げている。

(4) 調査実習は、本来、別に設定されるべきものだが、2.9 調査票の作成、2.10 聴取調査では、ミニ調査経験が得られるよう設定した。

これらのうちで、私たちが最も重視したのは、いうまでもなく (2) である。これで、少なくとも私の学生時代の苦しみは軽減されると自負していたが、これには功もあれば罪もある。他の参考書を探してさらに追究するという努力をしなくなりがちである。たとえば、2.5 コーディング（職業分類）では、解説欄にある職業分類の定義だけですませてしまう（確かに、正解を得ることは可能なのだが）。より詳しい『社会調査ハンドブック』や『日本標準職業分類』まで調べてみようとする学生は、残念ながら皆無であった。幸いにして、本書は予想以上に多くの読者を獲得することができたが、このような学生たちの期待外れの行動を生み出すという逆効果もあった。「余計なお節介をするからそうなるのだ」と、今は泉下の安田先生から厳しい叱責の声が聞こえてきそうだ。

他方で、「難しすぎる」という反響も少なくなかった。一冊に多くのことを詰め込もうとすれば、どうしても記述は中途半端になりがちであるし、

本書のような構成の場合、方々に分散してしまう。やはり、別に概説書なり教科書なりが必要なのだろう。

『社会調査実験マニュアル』で概説書として指示されていた、福武直『社会調査』（1958年）は、名著ではあるが、私が社会調査の授業を担当するようになった1970年代後半になると、さすがに古くさいという印象を免れなかった。福武先生、編集者、それに私との相談の結果、完全な新版を私が書くということになったが、とりあえず補訂版（1984年）を出しておくことにして、その手伝いをした。しかし、その後の編集者の定年退職や出版社の方針変更によって実現できなかった。

浅川達人氏に手伝ってもらった『社会調査』（放送大学教育振興会、2005年〔改訂版、2009年〕）の出版で、できのよくない宿題をとりあえず提出した気分であるものの、放送大学の教材であって、残念ながらマーケットが狭い。10年間の放送がようやく終了したので（最初は4年間の予定だった）、あらためて手を入れたいと考えている。

ところで、自分自身にとっても、他の教師の方々にとっても、省力の一番の助けになったのは、(1)ではなかったかと思う。しかし、調査データはなるべく新しいものに差し替えなければ、現実離れしたものになってしまう。作業内容や方法も、ExcelやSPSSなど、パソコンソフト利用を前提にしたものに変える必要があるが、意外なところにも時代の反映がみられる。

前記(3)の聴取調査は、学生たちが最も真剣に取り組んだものだろう。休暇中の課題で、自分の祖父母を対象にする者が多かったが、下宿のおばさんや食堂の親父さんに協力してもらう者もいた。照れくさかったのだろうか、祖父母を交換して調査した知恵者たちもいる。

この調査のなかに、「お宅にテレビが入ったのはいつ頃か憶えておられますか？ その頃の暮しの様子はどんなでしたか？」という質問項目がある。高度経済成長を背景にした生活の変化を思い出す糸口として考えたものだが、今は意図を理解するのさえ難しいのではないかと。毎年恒例となった、最終回の授業での聴取調査報告会の盛り上りは懐かしいけれども、「もうこんな質問も意味をなさなくなってしまったな」と、時の流れを痛感させられる。